足立区立東加平小学校　研究推進部

昨年度（令和２年度）の研究は、研究主題「既習事項をもとに考える力を伸ばす算数科学習」と設定し、算数科における研究を予定していたが、コロナウィルスの影響で、多くの学校行事や授業に制限がかかってしまいました。その影響で、研究授業も行うことができませんでした。

そこで、本校では、今日的な課題としての「教員の指導力向上」に着目し、日々の授業の取組と成果を各学年、専科でそれぞれまとめ、紙面で伝え合うことにしました。

以下が、１年生～４年生、専科の授業での実践での成果と課題です。

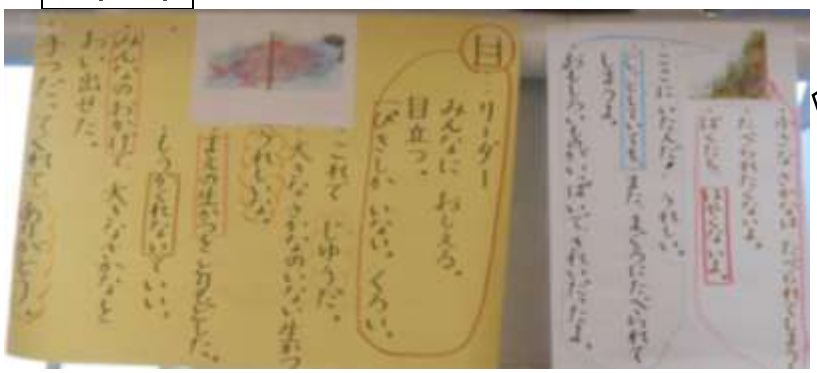
【１年生の学習の様子】

●実態

これまでひらがな・カタカナ学習を終え、促音、長音、拗音、拗長音など繰り返し取り組んできた。しかし、拗長音の習得に課題がある。音読については、活動内容が制限される中、微音読させたり、教師の範読を鉛筆や指で示しながら追わせたりするなどして、文字と音の結び付きを捉えさせた。が、正確に音読する力が十分に身に付いていない児童が多くいるため、キーフレーズにはサイドラインを引かせたり、印を付けさせたりするなど指導していく。「いきもののひみつ」や「のりものカードでつたえよう」の学習を経て、主語述語を使って短い文章を書いたり、物事を詳しくする言葉の使い方を学習し、付け足して書いたりする学習をしてきた。いずれも、絵と文をカードに書き、その二つの事柄がきちんと関連しているかを確かめながら進め、伝えたいことを表現することを学習した。「うみへのながいたび」では、場面の様子を想像しながら、物語の展開を楽しんで読み、場面の様子や出来事をノートにまとめた。本単元の「スイミー」では、中心人物であるスイミーの気持ちの変化を捉えられるように展開した。

●取組と成果

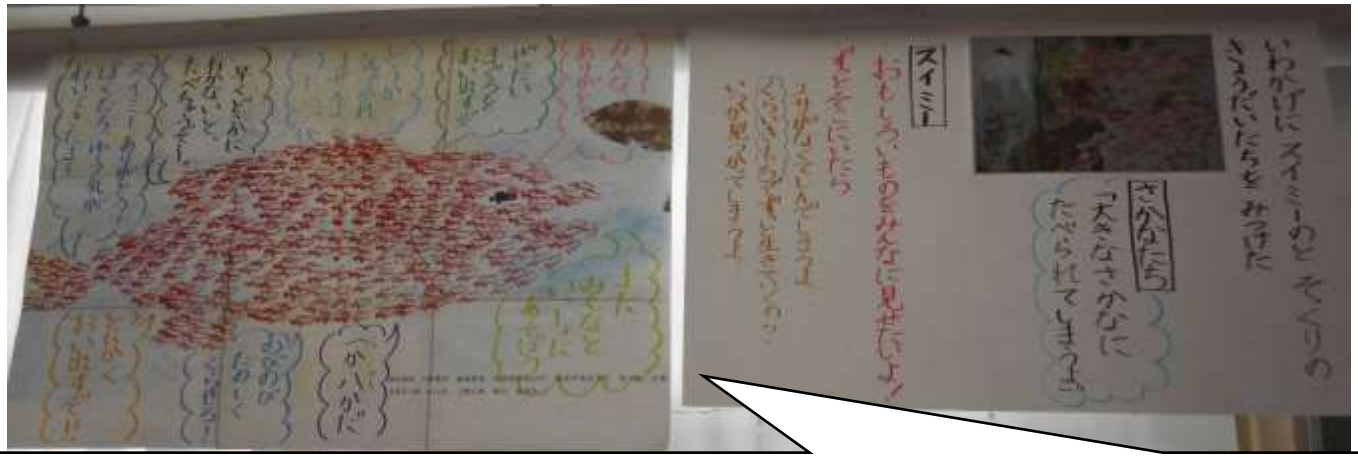
１年１組



・学習の初めと終わりに「スイミーの何がどのように変わったか」を考えた。最初は、「スイミーの気持ち・色々な場所に行くようになった・仲間、まぐろなど周りの様子」が変わったと書いていた。終わりには、「最初は逃げていたけど、赤い魚たちと協力して、まぐろを追い出した」「初めと同じで、平和な海になった」「まぐろを怖がらず、安心して暮らせるようになった」などの意見が出て、初めの場面と終わりの場面を比べて考えることができるようになってきた。

・スイミーの気持ちが分かる言葉に線を引いた後、吹き出しにスイミーの気持ちや考えたことを想像して書き、話し合うことができた。しかし、学習活動が多くなった。どの児童も比べて考えることができるように、「スイミーの気持ち」に注目して、気持ちの変化をグラフなどに表し、視覚的に表した方が分かりやすかった。

１年２組



・読み取りを進めていく中で、毎時間の始めに、掲示物を用いて前回の場面を振り返ってから、本時の場面を考えるように展開した。児童自ら、この時間に取り組む課題（めあて）を考え、学習に向かうことができた。
・話し合いを通して、場面を追うごとに自分の考えをノートにまとめる力が高まった。また、文中の具体的な言葉からこう思ったと、根拠をもって伝えることができる児童が増えた。
・掲示物を抽象的な内容に示し、教師が聞くことで、「ミサイルみたいに」や「ゼリーのような」などの詳しくする言葉に気を付けながら読むことができた。また、場面の出来事や人物の様子を的確に捉えることに繋がった。

１年３組

各場面の読み取りを終えた後の活動として、スイミーになったつもりで台詞を考え交流した。各自が好きな場面を複数選び、それぞれの場面でスイミーがどんな気持ちでどんな言葉を言ったか想像し、ノートに記述させ、その後全体で共有した。

なかなか記述できない子も、友達の発表を聞き参考にすることができた。また、同じ場面でも様々な感情があることや、言い方の違いに気付くこともできた。

ノートの記述が難しい児童には、挿絵と吹き出しを使って表現させれば良かった。

【今後の課題】

・人物の気持ちを一言でノートに表す児童が多く、気持ちを深く考えることが難しかった。
　→登場人物の立場に立って考えられるような場面の写真や映像など具体物を示していく。
　→語彙を増やすこと（MIM）、読書習慣をつけさせること、発問後にさらに切り替えすこと　などを行う。
・形成的評価の段階で倒置法の意味や機能について、十分に理解している児童が少なかった。
　→通常の文を倒置法にしたり、倒置法を通常の文に戻したりする。
　→倒置法で会話してみるなど活動を充実させていく。

【２年生学習の様子】

＜国語　かさこじぞう＞

〇どの学級も共通して取り組んだこと

・全場面、叙述に基づき様子を捉えてから、登場人物の気持ちを考えた

・登場人物の気持ちを考えやすいように、挿絵と吹き出しを使った。

・登場人物のセリフや様子を動作化して、場面の読み取りを深めた。

・前の場面からの繋がりを考えやすいように、掲示したり、まとめたりした。

・昔の言葉や表現を抑えて、時代背景や登場人物の状況を捉えやすいようにした。

〇２組は、三場面の「じいさまが、じぞうさまに かさこを かぶせた時の気持ち」を考え、１組３組は、四場面の「じいさまと ばあさまが もちつきのまねごとを した時の気持ち」を考えた。

＜２－１＞

・毎時間学習したことを掲示したことで、段落のつながりが考えやすくなったり、じいさまの気持ちを前の場面と比べて考えやすくなったりした。

・セリフの部分（「米のもちこ、ひとうす ばったら」）のところは、動きをつけながら音読することで、様子や気持ちを読み取ることができた。

＜２－２＞

・本文に線を引きながら文を読むことで、叙述に基づいて登場人物の気持ちを考えることができた。

・挿絵に吹き出しを付け、そこに登場人物の気持ちを書かせることで、児童が考えやすくした。

・ワークシートを使用することで、児童の思考の流れをスムーズにさせた。
・児童が知らない言葉（「あわ」とは、どんなものか。米よりも粗末であること。）を画像や情報を使って丁寧に抑えることで、背景を知り、登場人物の気持ちを考える上での参考にした。

【２年生課題】

〇友達の意見に対して反応することはできているが、自分の考えと比較して反応することに課題が残る。児童が自分の意見と比べて、「似ている」「違う」「付け足し」など考えて反応できるようにしていく。
〇主発問に行く前に教師が話しすぎてしまうことが多かった。そのため、４５分間を過ぎてしまうことがあった。事前に物語を読み込み、子供に抑えさせなければならない所を明確にして授業の組み立てを行い、時間配分をする。
〇ずっと単調な声のトーンではなく、発問時は演技をするように声に抑揚を付け、話し方を工夫する。しかし、一方で、演技するように話すと、楽しくなり、教師の思わぬ方向へ児童が向かってしまうことがあるため、気持ちが切り替えられるように取り組んでいく。
〇昔話特有の表現のおもしろさを十分に味わわせる。
〇児童から出てきた疑問を拾い、物語の面白さや楽しさを感じられるようにする。五場面で、「じぞうさまは、なぜ、じいさまだけでなく、ばあさまのことも探していたのだろうか。」という疑問を解決するためには、ばあさまの人柄を理解できるように深める必要があった。場面の読み取りを通して、疑問の解決に繋がるよう、毎時間、種をまけるようにする。

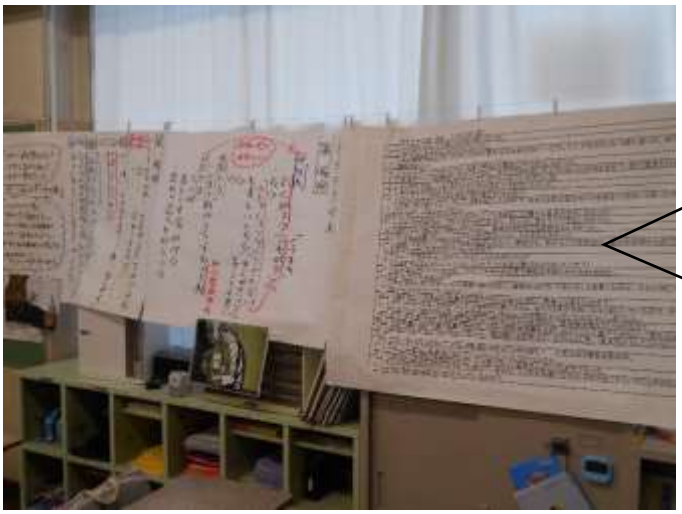
【３年生学習の様子】

＜国語　モチモチの木＞

〇あらすじ

峠の猟師小屋に祖父と住む豆太は小心者で、夜は祖父を起こさないと便所に行けないほど。家の前にある木は豆太が「モチモチの木」と名づけたトチの木がありその木が怖いのであった。ただし昼は全く怖がらない。そんなある晩、祖乳は腹痛で苦しみだす。祖父を助けるには暗闇の中、モチモチの木の前を通り、半里（約 2km）も離れた麓（ふもと）の村まで医者を呼びに行かなければならない。豆太は勇気を振り絞り医者を呼びに行き、祖父は助かる。なんとそのときモチモチの木に雪明かりがともり、祖父の話していた霜月の二十日の丑三つ時の晩に勇気のある者だけが見る事の出来る「山の神様の祭り」とはこのことだったのだと意味を知る。しかし、祖父の病気が治ると豆太はまた元の小心者に戻り、祖父を起こさないと便所に行けない。

＜３－１＞



・初発の感想から学習計画を考えて、主人公豆太の気持ちを場面ごとに考えることで、子供たちの意欲を持続させて授業を行うことができた。
・毎時間学習したことを掲示したことで、段落のつながりが考えやすくなったり、豆太の気持ちを前の場面と比べて考えやすくなったりした。

＜３－２＞

・モチモチの木の絵本から場面にあった挿絵を用意し提示することで、子供たちが毎時間の豆太の気持ちを考えることができた。
・板書のまま掲示物を作成したので、授業の振り返りがしやすくなった。

＜３－３＞

・場面ごとの豆太の性格を掲示物に表し、場面ごとの移り変わりを意識することができた。
・一場面と五場面の豆太の様子が同じであることから最後の主発問を児童の言葉で考えることができた。

【３年生課題】

○第７時で、「第一場面と第五場面で豆太は変わったか」という発問をしたが、多くの児童は変わっていないという答えだった。豆太の行動的には、また、豆太はしょんべんに行くのに、じさまを起こしているので、変わっていない。発問が反省点である。「豆太は成長したか。」という発問であれば、行動は変わっていないが中身は変わったと深い考えが出てきたと思う。発問の吟味が課題である。
〇豆太の気持ちを叙述から抜き出して考える活動を行ったが、板書をするときに考えと理由が同じ色だったため違いが分かりづらかった。黒板を見やすく、分かりやすく書いていくことが今後の課題である。
〇主発問に行く前に、補助発問をしすぎたり、振り返りの時間をとりすぎたりと教師が話過ぎてしまうことが多かった。教師が主導ではなく、児童が主体的に取り組める授業づくりをしていく。

【４年生の学習の様子】

【教　科】外国語活動

【単元名】「What do you want？」ほしいものは何かな？

【活動内容】

食材の言い方や欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しみ、オリジナルのパフェとピザを作り、紹介する。

「Today’s Goal」今日のめあてを毎時間確認することで、目的意識をもって学習に取り組むことができ

デモンストレーションで子供と同じ紅白帽（赤：店員　白：客）を持つことで、自分の立場がより分かりやすくなり、何をどのように話してよいかが明確になった。

紅白帽で色分けをすることで、店員と客が一目で分かり、自分の立場を明確にしたり、やりとりがスムーズにできたりし

パフェやピザを作るという目的意識がもてていたので、１人１人が会話文を覚えることができた。「Hello！」から自然に会話が始まり、食材集めを通して、英語が話せることに喜びを感じながら活動できた。

活動中に「いいね！」「ナイス！」「Cool！」「Good！」などの誉め言葉を伝えることで活動意欲が増し、英語を話すことに自信がもてたようだった。

活動の途中でやりとりをした際に困ったことを聞くことで、英語で自分の思いを存分に伝えられ、満足感につながった様子が見られた。

事前にパフェやピザに入れたい食材アンケートを取り、自分が作りたいものを作ることができた。外国語活動で重要である、目的・場面・状況を上手く設定できた。

活動意欲を高めるために、食材アンケートをもとに、教材を準備した。来年度のためにも、データで残している。

【４年生の課題】

・指示英語を覚え、日常的に使う。
・ジェスチャーを伴った指示英語を使い、子供たちに分かりやすく伝える。
・活動中の個々への言葉かけ（意欲や満足感、達成感を味わわせる）
・一人一人の学習状況をみとる。
・つまずきがある子への個別指導。
・本時のめあてを達成するための手立てを複数考える。
・既習表現を他教科や日常生活において取り入れる。
・単元によっては学習意欲を高めることが難しい。
・教科書にある資料以外にも情報を多く用意しておくと、より自然なコミュニケーションになるが、準備に相当な時間がかかるので毎回はできなかった。
　→次年度に生かせるように、データ化した。
・お店によって食材の人気度が異なったため、言語材料を使ったやりとりに差が生じた。

【専科の学習の様子】

＜音楽＞

思いや考えを深める授業の実践

『鑑賞：和楽器の音色を味わう』

曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解し、よさを味わって聴くことができるようにすることをめあてに、「春の海」（宮城道雄作曲）を鑑賞した。

子どもから出された**初発の感想をもと**にして、聴くポイントを絞り、曲の仕組みや音色などと結びつけていったので、面白さや良さを理解しやすくなった。また、作曲者の事、曲の成り立ちなど背景も話す事が、状況を想像することに役立ち、CD だけでなく、DVD も活用したことで興味を持って鑑賞することができ深めることができた。

曲想と構造を結びつけていく思考は指導者側の発問も重要であるし、鑑賞だけではなくいろいろな面で繰り返し考えさせ慣れさせる事も必要である。ワークシートもこの結びつきが子供にとってひと目でわかるようにするための改善が必要である。

＜図工＞

考えを深め、発想力・想像力を高めるための指導・実践

『牛乳パックを使った小物入れの製作』

貼り付けてもすぐに取り外すことができる牛乳パックと布ガムテープを使用して、小物入れの形を考える活動を行った。

貼り付いても取り外すことができる素材を使ったことで、作ってみたけれどやめたり、作りながらよりいい方法を見つけたり、どうしたら入れたいものを入れられるかを考えたり等、ねらいに迫ることができた。

すぐに活動を終えて手を止めてしまう児童への手だて、また、考えが浮かばずに手が止まってしまう児童や考えていることはあるものの技能が乏しくどう表現していいかわからずに手が止まってしまう児童等への手だてについて、今後工夫していきたい。

〈家庭科〉

自らの生活の中から課題を見つけ、課題を解決していく授業実践

『衣服の働きについて考える』

普段当たり前に身に付けているものについて改めて見つめ直すことで、衣服の良さに気づくだけでなく、自分が選択したり購入したりする際に根拠をもって考えることができる児童になってほしい、という私の思いをもって行った。

児童の身近な生活場面を想定し、どのような衣服を身に付け、それぞれどのような特徴があるのかをまとめていく活動を個人⇒全体で行ったが、その先にある衣服の選択や購入には、各家庭の環境や経済状況が反映されるため、児童自身だけで判断・意思決定ができないことを指導者側は押さえておく必要がある。

<u>課　題</u>

OECDや全国学力テストの結果を受けて、どの学習においても、自分が考えた理由や根拠を必ず示すように学習を進めてきた。そのことを「今」だけではなく「これから先・次・数年後…」につなげて考え、年齢や生活環境、立場等が変化した時々にも学習が生きるよう、常にイメージをもたせて学習を行っていきたい。